

## 出逢いの巻

海の近くのこの基地は、すぐ裏に森を背負っていました。基地はふつう、市街地から離れた、静かな場所につくられます。建造ドックやら入渠ドックやら常に物音をたてているからであり、夜中でも早朝でも有事とあらば出撃しなければならぬ、艦娘さんたちの騒音を住民から遠ざけるためでありました。

とはいえ森の中は静かなもので、市街地側は住民が、基地側は艦娘が、よく遊んだり散歩をしたりと、それぞれの生活に馴染む景色となっています。

ここにもひとり、森を散歩する艦娘さんがいました。航空戦艦『山城』の記録からつくられた、背の高い艦娘さんです。非番の日、山城さんはよく歩きます。普段の制服を脱いだジャージ姿で、無防備に、なんの目的もなく、ただ歩くのが趣味なのです。

よく晴れた六月のお昼過ぎでした。木々の広げる緑の隙間から、やわらかな

日差しが山城さんを包んでいます。山城さんは冷たい印象を与えがちな整った顔を、わずかばかり緩めながら、木漏れ日に目を細めました。

ひゅうん、と風を切る音が、山城さんの耳をかすめました。その音は山城さんのさらさらした髪をひと房ばかり巻き上げて、ぼとつ、地面に落ちました。着陸というにはぎこちない音をたてたそれは九十九式艦上爆撃機。装備開発にかかわると頻繁に目にする艦載機ですが、山城さんはそれが動いているところを初めて見ました。なにせ装備があつたって、それを載せられる艦娘さんが、いままでこの基地には着任していません。

九九艦爆は、山城さんの見下ろす先でしばらくジタバタしたあと沈黙します。山城さんは、その上部ハッチを開けて小さな妖精さんが這い出してくるのを、なんとなく見届けました。

妖精さんは九九艦爆の上で座り込み、砂埃でくしやみをします。山城さんは、妖精さんが頭をふるふると振り、立ち上がろうとしたところを、艦載機ごと持ち上げました。

「どこの子？」

九九艦爆の妖精さんは、山城さんの睨むような視線（ただ目つきが悪いだけです）に萎縮したようで、小さくなってふるふる震え出しました。これでは話が聞けそうにありません。山城さんは考えて、妖精さんを手のひらにきちんと載せてから、今度はちよっぱり優しく問いかけました。どこの子？

妖精さんは少し落ち着いて、ちいさな手で山城さんをまっすぐ指さしました。しかし、山城さんのことを示しているわけではありません。山城さんのうしろにある何かを指しているのです。

山城さんが背後を振り向くと、黒髪をひとつに結った女の子が樹の影からそつとこちらを窺っていました。背丈は山城さんの腰の高さくらい。おさない顔に、あきらかな怯えの色を浮かべていました。

体のおおきさに不釣り合いな、おおきな和弓を抱えた女の子。艦娘さんであることは間違いありませんが、まだ造られて間もないのでしょうか、山城さんの知った顔ではありません。重巡洋艦級以上の艦娘はふつう、山城さんのような人間でいう成人女性の姿でつくられます。しかし、たまにこうして小さな子供の姿で建造されることがありました。

「あなたの子？」

山城さんが、今度は最初からやわらかく訊ねると、女の子はうなずいたようでした。人見知りをするのでしょうか、それとも山城さんが怖いのでしょうか、女の子は木陰から出てくる気配がありません。握った弓を胸に引き寄せて、体を縮ませています。自分の妖精くらい迎えに来なさいよ、とお腹の中でつぶやいて、山城さんは妖精さんを手に載せたまま女の子に近づきました。

女の子との距離は山城さんの歩幅で十五歩ほどでした。目の前にやってきた山城さんを、女の子は上目使いに見上げます。その表情には、さきほどから緊張と怯えが消えません。しかし、山城さんは気にせず、九九艦爆と妖精さんを目の前に差し出してやりました。

女の子が恐る恐る手を出したので、九九艦爆のちいさな妖精さんは、喜んでやわらかい手のひらの上に飛び移っていききました。顔を合わせて笑みをこぼす姿に、山城さんはちよつとだけ和みました。

「……ほどほどにね」

「！」